

日本社会情報学会の創設について

田中 一

このシンポジウムも終わりに近づきましたが、シンポジウムを計画された研究委員会の方から日本社会情報学会の創設について一言いう機会を設けて下さいましたので、皆さんお疲れの所かとは思いますが、若干お時間を拝借したいと存じます。

学会設立まで

この4月14日に日本社会情報学会が設立されました。それまでの経過を簡単に申し上げます。

一昨年の3月東京大学の社会情報研究所の方から社会情報に関する研究会を開いてはという提案があり、急遽同年の3月共同主催のシンポジウムを開くことに致しました。このときには向こうから6人いらっしゃいました。前日は先方の教授会があったものですから、当日の朝出発されて12時にこの学部にお着きになり、12時半から早速研究会を開始しました。このシンポジウムでは、途中僅かな休憩時間を挟んだのみで、午後6時半までホットな議論が続きました。

シンポジウムはその後も引き続いて開催され、昨年9月には、群馬大学社会情報学部の主催で第3回社会情報学シンポジウムが開催されました。このときには参加者が予想をかなり超えて100名以上に達しました。最後の討論で、今後の社会情報学の研究体制を論じ、早急に社会情報学会を設立すべきであるという結論に達しました。

上に述べた最初のシンポジウムのホットな



田中 一氏

討論や、それ以後の参加者の急激な増加ぶりを見て、私は社会情報学形成の模索の熱意がそれぞれの大学に立ちこめているように思いました。実際私どもの学部でも学生諸君からしばしば真剣な質問を受けます。「社会情報学とは何であるか」と。それに対して教員の側で必ずしも適切な答が用意できているとはいえないと思います。

この学部の設立年の4月1日(月)に第1回教授会を開催しましたが、その席上、狩野現学部長が「講義の冒頭に皆さんが一様に社会情報学とは何か私は分からないと言え、学生が戸惑うばかりである。その様なことは一人だけ言えばよいことである」と発言され、会議を主催していた私は実にもっともな適切な意見であると印象づけられたことを覚えています。この事実もまた多くの教員が社会情報学について模索の段階にあったことをよく物語っています。

このような模索が、東大の社会情報研究所や札幌学院大学に続いて設立された大妻女子大学、群馬大学、呉大学の社会情報学部に渦

巻いていました。この真剣な模索に支えられて、社会情報学会は設立すべくして設立されるべきものであり、またこの機を失うことなく設立しなければならないというのが私の考えでした。その後、昨年12月3日に第1回学会設立世話人会を開き、続いて今年3月17日に、同第2回世話人会を開催、設立趣意書案の作成や設立総会の日を4月14日にすることを決めました。設立趣意書と発起人は3月24日までに確定することができ、直ちに賛同者を求めるに到りました。まもなく予定通り、4月14日に設立総会を開催し、ここに日本社会情報学会の創設を見ることができました。僅か3週間の期間でしたが、設立総会時の発起人と賛同者総数は195人で、実際にお出でになったのは50人程度でしたが、賛同書を頂いた方に改めて求めました設立総会への出席のご返事は、委任を含めて136名に達しました。極めて短期間のことでしたが、それにも拘わらずこのような結果が得られたことについて、私は総会の会長挨拶で、次のように申しました。「極めて短期間の呼びかけで学会の成立を見ました。これは次のことを意味します。その第一は、それぞれの関連学部や学科や研究所で社会情報学の模索が熱心に展開されていることであり、第二にこれらの多くの方々が、社会情報学会に未来を感じておられることです」と。

現在(1996年7月25日)の会員数は214名、内大学教員190名、大学院学生4名、学生(社会人入学)1名、大学外15名となっています。会長は私で、副会長は高木教典関西大学教授(同総合情報学部長)と福村晃夫中京大学大学院教授(情報科学研究科長)のお二人で、その他7名の理事と2名の監事で構成されています。なお11月16日と17日の両日、大妻女子大学の多摩キャンパスで第1回研究大会を開催することになっています。

社会情報学会とはどういう学会ですかと問われたときどのように答えるべきかはなかな

か難しいことですが、社会情報学の研究者と分野を問わず是に関心を持つ方々の集まりというのが、妥当なところかと思います。それでは社会情報学とは何かということになります。

社会情報学について

この問いに対して多くの方が共有する答えを見出すことは大変だと思いますが、ここでは全くの私見を述べることをお許し下さい。そのためもう少し時間を頂くようお願いいたします。この内容は現在私が担当しております4年目の社会情報特論1の一部です。

今までたびたび申し上げてきたことですが、社会情報学が個別科学として形成される以上、まず個別科学を特徴付けるものは何かということから考察すべきではないかと考えます。それは今までたびたび申し上げたことであり、また『研究過程論』の中で(田中1988:203-211)初めて指摘したことでありますが、個別科学は研究対象と研究方法および評価体系の三つによって特徴付けられるように思います。字典を引きますと、個別科学は研究対象と研究方法によって特徴付けられるとありますが、私はどうもそれだけではないように思います。例えば、幾つかの分野の科学が集まって、総合科学の研究を展開することがよくあります。しかしながら、その場合、かならずしも一つの個別科学が形成されるには限らないのです。そのどちらになるかを分けるものが評価体系の有無であるということです。例えば、人間科学ですが、これに関係する分野は極めて多いかと思うのですが、何か論文が出ましたときに、この論文が人間科学の論文として意味があるか否かを判断するための基準の有無、つまり人間科学の論文としてどのような価値を持っているか、その評価を可能にする評価体系があるか否かが人間科学のみならず、個別科学が個別科学として

形成されているか否かの別れ目になるのではないかと思うのです。

このように思いながら、少し前ですが、岩波講座の認知科学の第一巻『認知科学の基礎』を拝見しておりましたところ、その最初に慶応の安西さんが認知科学とはどういうものであるかを述べておられました(安西 1995: 10)。それは「脳と心の働きを情報の概念や情報学の方法論に基づいて明らかにし、生物とくに人間の理解を深める」というものです。これを見てみますと、丁度研究対象は何であり、研究方法はどのようなもので、その評価体系はいかなるものかに対応して纏められているように思います。再録を厭わずに掲げれば、「(対象)脳と心の働きを(方法)情報の概念や情報学の方法論に基づいて明らかにし、(評価体系)生物とくに人間の理解を深める」となります。

この結果を大いに参考に致しまして、私は個別科学としての社会情報学を「(対象)社会の情報現象の特徴と基本を明らかにし、(方法)社会科学と情報科学の概念と方法に基づき、(評価体系)社会現象を情報現象としていかに理解したか」というように考えてはどうかと思っています。言ってみれば何でもないことではないかとその様にお考えだと思います。確かに何でもないことです。何でもないということは大切なことであると思っています。何でもないということをもう少し格調高くいえば、普遍的ということです。それで、これが普遍的な定式化になればと思っています。

それではどんな研究課題があるかということです。決して全部ではありませんが、さし当たり思いついたところでは、社会情報過程の特徴、情報の社会性、情報社会の基本政策を挙げるができるかと思っています。

社会の情報現象の特徴と基本という場合には、他の情報過程に対して社会情報現象がどのような特質を持つかを明らかにしなければ

なりません。ただ単に他の情報過程と異なるということだけを述べるだけでは、その特質を指摘したとはいえないでしょう。

私は社会情報過程が計算不可能な過程からなるという点にその特徴があると思います。通常の情報過程は全てコンピュータのようにオートマトンという情報過程であると考えられています。したがって、計算可能とみて良いものです。これに対して、社会情報過程はプログラム過程とは言い切れないところがあって、それが社会情報過程の特徴となっているように思います。

またこのような特質が基になって、情報が他の要因と共に社会現象の担い手になるとき、情報は社会性をもつようになり、多様な社会現象の情報現象としての側面を担います。これを全面的に明らかにするところに、情報の社会性という課題が浮かび上がります。

これらの研究の展開の中で、どのような社会学の概念と情報科学の概念が、またそれぞれの方法が、いかなる役割を演ずるかはまだ全く今後の問題です。

最後に情報社会の基本政策について一言致します。かつて大審院は、盗電にかんする控訴事件の判決に際して、初めて電気は物なりと裁定しました。この種の課題は今や山積しています。その多くは情報と物との存在様式の相違に基づくものです。ここに社会情報学が情報社会の基本政策に寄与せざるを得ない所以があると言わねばなりません。日暮れて道遠しの感なきにあらずですが。

さていろいろなことを申しましたが、それは兎に角、社会情報学会は社会情報学とこれに関心を持つ方々で構成しております。申し遅れましたが、事務局長は先ほどサマリートークをした是永君が引き受けておられる、正確には引き受けさせられていますが、申込用紙を用意しています。皆さん振るってご加入下さいますよう。この一言を言うには前置

きが長すぎましたが。

文 献

田中 一(1988)『研究過程論』北海道大学図書刊
行会

安西祐一郎(1995)『認知科学の基礎』岩波講座認
知科学1, 岩波書店